

## 舞台芸術系中間公演「三人姉妹」を演出して

村松幹男（北翔大学短期大学部）

北翔大学短期大学部人間総合学科舞台芸術系三期生の中間公演「三人姉妹」が、二〇〇七年五月十七日、十八日、札幌市教育文化会館小ホールにおいて上演された。「三人姉妹」の演出を担当したものと、中間公演・卒業公演を行う教育的意味合いを簡単に紹介したい。

## 舞台芸術系の公演発表表について

舞台芸術系では、前号のPROBEでも紹介したように、徹底的に実践を重んじている。授業のなかでも「5分間ストーリー」のような発表形式の短い演劇を二年間で最低四回は行っているし、その他にも服飾美術系の学生が主体となるファッションショーや外部講師の講演会のような学内外で行われる「イベント」の裏方にも積極的に関わっている。そのような実践重視の教育の中で、その中核にあるのが、二年間の学生生活で行う四本の公演発表表である。

一本目は「一年次試演会」。一年の前学期終了時（たいていは八月の大学祭中）に、一時間ぐらいの芝居を公演する。二本目は、一年目の一月ごろから準備を始め、長い春休みを経て、

二年目の五月に公演する「中間公演」。三本目は学生自身が企画し、お金のことも含めてすべて学生の手によって上演まで行う「二年次試演会」（たいていは九月から十月）。そして、十二月に行う「卒業公演」である。なお、「中間公演」と「卒業公演」は当初、観客数（百名から百五十名）を考えて一ステージにしていたが、教育的効果を考えて現在は二ステージ行っている（観客数をどう増やすかは大きな問題となっている）。

「中間公演」と「卒業公演」は、欧米の古典といわれる作品をできるだけテキストに忠実に上演してきた。

入学当初、少なからずの学生が「海外モノはやりたくないな」という声を上げるが、欧米の古典を公演する教育的利点を以下のように説明している。

- ・異文化を知り、日本文化との共通点や相違点に注意と関心を持つてもらうため。
- ・学生の知らない時代（背景）を知ってもらうため。
- ・地域も時代も違うテキストを扱うことによって、人の心理や人間関係の普遍性や相違点を探ってもらうため。

また、できるだけテキストに忠実に上演する（斬新な演出は行わない）ことによつて、

・テキストをより深く読み込まなければならない。

・テキスト等を改変して、自分たちのやりやすい表現にする等の、安易な方法が取れない。

・想像し、創造しなければならない。

現代の日本作家の作品をやりたいなら、サポートはするから、自主公演を企画しなさいと言っている。

しかしながら、我々教員側としては、毎回作品選びに苦勞している。男子が圧倒的に少ないので、なかなか適当な作品がない。

学生の学力低下や本を読まない等の問題が言われている中、それを少しでも補うために、強制的に戯曲を読ませる意味合いを含めて、公演候補作品を三本から五本用意し、学生に読ませ、学生に選ばせるといふ方法がいいねという、話が出ている。いいアイデアだと思うが、公演に参加できる学生数（と、その実力）に見合った作品をそれだけ用意する余裕が我々教員側がない。なんとか実現できれば…と思っているのだが。

### 「三人姉妹」

さて、「三人姉妹」である。

できるだけテキストに忠実に…とは言つても、実際はなか

なか難しい。まず、なんとか言つても我々の実力や小屋の時間的制限を考えると、公演時間を二時間以内、できれば一時間半ぐらいにしたい。そうなるかどうかしててもテキストレジが必要になる。

このテキストレジがなかなか難しかった。革命前（といっても十数年前だが）のロシアの雰囲気は漂うヴェルシーニンやトゥーゼンバッハの哲学的な会話や長台詞などはカットせざるを得なかった。学生の人生経験からいっても台詞術から言つても、これらの台詞を言わせることはお客さんを退屈させることになっただろう。総じて、事件と人間関係だけを追う結果となり、「三人姉妹」のもつ厚さみたいなものを削つてしまうことになった。

それにしても、「三人姉妹」は名作だと、改めて感じさせられた。演出的には、登場人物のどの人物に焦点を当てても作品は成立する。また、徹底的に喜劇として表現しても成立するだろうし、重く、重く表現することも可能であろう。テキスト自体がもつこの多様性にはほとほと感心させられた。



この辺のことは、演出中に学生に語ったものの、もう少し突っ込んで学生に考えさせたり、議論したりすべきだったと思う。どうしても演出していると、作品を成立させることに神経が行ってしまう。大学教育で行っている以上、この辺に時間と神経をもっと割くべきであったと反省している。

私の演出の方法論としては、繰り返し述べているように「できるだけテキストに忠実に」と言う以外、最初から演出プランを提示しない方法を取っている。つまり、「できるだけテキストに忠実に」という、その「忠実」の具体性を提示しない。提示するのは役者のおおまかな出入り場所ぐらいである（それも最初は暫定であり、変えたければ変えてもいいと言っている）。

キャラクターや関係性、雰囲気等は、まず学生に考えさせる（今回は、登場人物相関図を書かせた）。そしてある程度シーンが通るようになってから、具体的演出（役者プランの変更も含めて）行うようにしている。最初からこちらのプランを提示した方が楽であったり、より良いものができたりするのかもしれないが、役者が演出の言われたとおりのことを再現するだけの存在になってほしくない、あくまでも表現者として存在してほしい、考える力を養ってほしいと思っているからである。

ところで、毎回別の作品を取り扱っているが、教員同士では中間公演でテキストに忠実に上演し、卒業公演で大胆な演出をとり入れた形で上演するという方法も学生の勉強にはなるのではないかとの話もしている。発想や視点を変えることによって、

作品が大きく変わっていく体験も学生にとっては、重要なことだろう。

演出の部分は、もちろん学生にやらせることも可能ではあるが、教育という側面を考慮して、また短期大学の二年間という時間的短さも勘案して、教員が担っている。舞台監督をする学生は、演出補的役割を担わせ、教員不在のときはその学生を中心に稽古をさせている。

衣装はもともと苦勞した部分である。なんといってもお金がないので、いろいろな資料をもとに、「それらしく見せる」という方法を取らざるを得なかった。軍服などは白衣を染め、加工して作った。軍足も作業靴を購入してすませるしかなかった。本学科には服飾美術系があるので、その学生とコラボレーションできると随分良いものになると思うし、実際服飾美術系の教員ともコラボレーションの話はしている。しかしながら、服飾美術系もいろいろなイベントを抱えているので、実現するには、もう少し時間が掛かりそうだ。

小道具も同様である。サモワールに関してはなんとか手に入ったが、他に關しては「らしい」という範疇を越えることはできなかった。お金のことは仕方がないが、衣装・小道具とも、「時間」がなくて、妥協した点多かった。教員側も、どうしても演技者の方に時間と神経を掛けがちになる。この辺は今後の反省材料となろう。



第一幕

# 三人姉妹

北翔大学知用大学演劇会学芸科舞台芸術系中明公演

作：アントン・チェーホフ  
演出：村松秀男

5月17日-18日

会場 18:30/演劇 19:00

札幌市教育文化会館小ホール  
札幌市中央区南一条西1丁目



入場料：前席 1200円（学生が子 1000円）  
並日 1000円（学生が子 1200円）

お問い合わせ：192298 fax:011-820-2600 公演

「三人姉妹」ポスター



第三幕